

---

# 魔法少女リリカルなのは Light.the. story

クロック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Light・the・story

### 【Nコード】

N0075I

### 【作者名】

クロック

### 【あらすじ】

闇に葬られた部隊『第七独立武装中隊』。

その部隊にいた天才と対なるもの……もうひとりの天才と称された少年の……エリオット・ラージェストの物語。

彼は失ったものを取り戻せるのか……。大切なものを守れるのか……。そして彼の部下の少年は、そんな彼を助けられるのか！？

shadow・the・storyとは別視点から、とある一年の物語を紡ぎます……。

## プロローグ：とある事件の始まり（前編）（前書き）

どうも、クロックです。

これで連載小説は三作品目、そろそろ限界ですかね。

でも全部同じ時間枠の世界なのですが大丈夫なんでしょうかね。ではどうぞ

## ブローグ：とある事件の始まり（前編）

「お前を置いていけるわけ無いだろう!!」

そう叫ぶ誰かの声が聞こえていた、それは置いて行けと誰かに言われたであろう、強き思いのこもった言葉だった。

そしてそれを言われたであろう少女はこう返した。

「でも……あたしは……このままじゃ助から……ないから、あなただけでも……生きてくれたらいいなと思うんだ……」

そう言って彼女は俺を突き飛ばして、何かのボタンを押していた。それを押すと同時に、俺の目の前のシャツが下りていく。

「私を忘れないでね……」

俺はその言葉と共に目を覚ました。

新暦75年12月3日、俺は、ミッドチルダを見下ろす丘に来ていた。

「毎年ここ来ると、気がまいるよ……」  
そう言っただ俺は薄く笑い、その場所にある、二つの墓に花を手向けた、

俺は、ひとつの墓の横に、花が一輪添えられてくるのを見た。

「お前は先に来ていたんだな……レン」  
俺がそう呟くと、何処からか風が吹き、その一輪の花を吹き飛ばした。

まるで、何かを予言するように。

新暦77年 2月26日 PM14:10 ミッドチルダ某所

「……………はありません」

俺は昔のことを思い出していた、

そのためか、部下の隊員の報告をまったく聞いていなかったの  
で、「すまない、もう一度言ってくれ」

そう頼んでみると、俺が聞き流していたことを分かっていたよう  
なので

「分かりました、では、エリオット部隊長、報告します。」

現在犯人グループ12名で、あのビルに立てこもり……………

」

と、報告を繰り返してくれた。

「中の犯人達は、人質を10名ばかり取り、未確認ですが、質量  
兵器を保持しているそうです」

「報告は聞いた、現場へ戻れ」

「はっ、失礼します！」

「……………しかし、またテロ事件か、一体この二ヶ月余りで、何  
件起きたかもう分からんな……………」

俺の名は、エリオット・ラージエスト、階級は二等空佐で、武装隊の一隊の司令官をやっている。

新暦75年に起きた、JS事件の影響で新体制へと移行している、管理局に対し、過激になるテロ事件、

正直に言つと、事件のレベルが少しずつ上がっているのは事実であり、対処に当たっている部隊でも、この一年で、類を見ないほどの殉職者を出している。

「はあ、あのおっさんが生きていたなら、多少強引な方法でも、簡単に解決するんだろうけどな……」

俺は一人で、そう言ってみるが周りに人がいるわけでもない、ただの独り言でしかない、

ただの……

P M 1 5 : 1 0

先ほど報告を受けてから、一時間あまりがたった、

「そろそろ定時の報告だというのに……まあ、報告するようないことが無かったのだろう」

俺はそう考える。

俺は動かない事件を、無理に解決しようとは思わない、逆に解決しようと躍起になれば、そのぶん被害も大きくなるからだ。

「エッ……エリオット部隊長!!」

そんなことを、適当に考えている時間も終わった、

「どうした?、

らしくないぞ、少し落ち着いたらどうだ」

全力疾走で走ってきたのか、物凄く息を切らした状態で大声で俺を呼んだ、

だが、俺は彼の報告を聞くことができなかった、何故なら、  
「伏せろ！！」

俺は、報告に来た彼に叫んだ、何故なら……  
彼の後ろには、一機の4型ガジェットドローンが巨大な刃を構えていたからである。

彼が俺の言葉を聞き、後ろにいるガジェットの存在に気づいたのか、急いで回避に移ろうとしたが、ガジェットの方が速く、隊員の体を胸から真つ二つに分断した。

俺は叫ぶことも何もしなかった、  
叫んだ所で無駄なのだ、切り裂かれたのは胸……  
その上、内臓の大半が流れ出していた。

医学的知識のあまり無い俺でも、彼が即死であることは分かった。

「質量兵器を保持している……か、  
やってくれるじゃないか！、クス鉄……  
フォルス！起動」

俺はデバイスを展開して構えた。

## ブローグ：とある事件の始まり（前編）（後書き）

さて、読んでくださった、皆様ありがとうございます。

更新速度は限界に近い速度でがんばるのでよろしく願います。



## ブローグ：とある事件の始まり（中編）（前書き）

取りあえず遅くなってすみません。

テストが終わって急いで書いたので、微妙な感じになっていますが、取りあえず寛大な目で見守ってください。

## プロローグ：とある事件の始まり（中編）

「俺たちは何がしたいんだろうな……」

親友は呟いた、俺たち四人は死んでいった仲間のことを思いながら。

ある計画を実行することを決める。

そしてあいつは、はっきりとこう言った。

「俺は、奴等を許さない……。だから俺は今日この剣に誓う。

たとえ何千何万。何億の屍の上に立とうと。絶対に復讐を成し遂げると……」

たぶんあの瞬間俺は、あいつを止めるべきだったんだと思う。  
あいつには、復讐なんて出来ない。だからあいつは苦悩する。  
それが分かっていたのだから……。

PM 15:11 ミッドチルダ某所

俺はフォルスを正眼に構え、およそ10メートル先にいるがジェ

ット4型と相対している

真逆にいる、ガジェット4型もじつとカメラでこちらを見つめて、刃を構えている。

俺が動き出そうとした時・・・

爆発

爆炎が巻き起こった、俺の後方・・・部隊の展開位置の後ろから、爆発が起こったのである。

不意打ちであつたため、俺は爆風に吹き飛ばされ、俺はガジェット4型の刃の射程に入ってしまった。

斬

俺の目の前に、ガジェット4型に刃が突き刺さる。

ガジェットが二撃目を振り下ろす前に俺は、

「六式転移陣」

親友が伝授してくれた、魔法でこの事件の、最前線へと進んだ。

ほんの少し前、事件現場。

僕の名前は、シェラード・・・シェラード・C・ロウラン。

たいていの人は僕のことを、ロウと呼びます。

階級は、一等空尉でこの部隊の副隊長です。

今現在僕が居るのは、テロ事件真っ盛りの中・・・・。立てこ

もり犯とのにらみ合い中です。

「はあ、何でこんな事件が続くんでしょうね」

そんなことを一人呟いてみると・・・

---

轟音

---

僕達の後方で、突如聞きなれないほどの爆音が聞こえた。

しかもその爆音と共に、タイミングを合わせる用に、中に立てこもっていたはずのテロリスト達が、一斉に飛び出してきた。

「全員、持ち場について落ち着いて交戦してください。絶対一人だ戦わないで、全体で囲むようにすること」

僕は、エリオット隊長の命令どおり、指示を出すと、こちらに向かってくるテロリストに備えた。

その時だった。

いくつもの閃光が、テロリスト達を貫いて、真っ赤な血が吹いた、そして続いて響くのは悲鳴。

それは僕達、武装隊から出なく、こちらに向かってきているテロリストの方から飛んでくる。

『助けてくれ！！！！』

そんな声が聞こえた気がした。  
だが、その時の僕には、何が起きているのか分からず。  
ただ、呆然と見ているしかなかった……。

すべてのテロリスト達が、惨殺されたあと、  
ここは地獄でしかなかった。

「酷い、何故こんな事に……」

僕は完全に油断していた。

だから、忘れていた。

まだ、テロリストを惨殺した、謎の閃光の正体に気づいていなかったことに。

「ロウラン伏せる!!」

いつも仲良くしている、同い年の隊員の声が響くが、  
僕にはわけが分からない。

だが、気がついた。

僕の真後ろには、鋭い刃をつけた。

二年前の災厄の事件の時に現れた、ガジェットドローンの4型だった。

気づいた……。だが意味が無いのだ。

僕の速度では、回避しきることが出来ない。

その上デバイスを起こそうにも、立ち上げるよりも早くあの刃は落ちてくるだろう。

圧倒的な積だ。

だから僕は、覚悟した。

目をつぶり、痛みに備えた。

10秒あまりたっただろうか。

恐怖で時間の感覚がズレているだけかも知れない。

だが、音も無く何も無いはずがないのだ。

恐る恐る、僕が目を開けると……。

「悪い、ロウラン。

俺は男の白雪姫には興味が無い……。だからさっさと起きろ！」

僕の目の前には、隊長がいた。

そうもつとも頼りになる……。あの人が。

ほんの少しだけ、遡ろう。

ロウランが刃を覚悟し目を伏せた時。

彼とガジェットの間、3mの間に、円形の魔法陣が現れた。

そしてその中からは、杖を構えた魔導士が現れた。

それは言うまでも無く、先ほど逃げたエリオットだったのだ。

彼は自分が現れた瞬間、ガジェットの腕が引かれたのだ。

つまり彼は逃げた時とほとんど換わらないところに出たのだ。

何だと！！

彼は自分の行った魔法を疑ったが、この状態になっでは仕方が無い  
と思います。

その攻撃を防ぐために、

「3rdフォーム、デス！！」

彼は自分の切り札とも言える姿を出したのだ。

その姿は死神、

真っ赤に燃える死神。

そして、手に握られていた杖は、鎌のような形に変わり、

刃の部分からは、真っ赤な炎が出ている。

そして、その死神の刃は、

金属で作られた騎兵の刃を、一瞬で液体に変えてしまった。

そして、彼はロウランを見たが、

いつまでもビビって、目を開けない。

10秒ほど待って、さすがに痺れを切らした、エリオットが、

「悪い、ロウラン。」

俺は男の白雪姫には興味が無い…。だからさっさと起きろ！

！」

以上が、ロウランが無事だった顛末である。

「ハーケン・オブ・フレイム！！」

俺が放った魔法は、刃に付けられている炎の鎌を、飛ばし、

その炎で焼き尽くす攻撃だが、

今度は、先ほどのように屑鉄は溶けない。

理由は簡単、

この炎は、手元にあるうちは、摂氏2000 超まで、温度を引き上げることは出来るが、

飛ばした炎は、せいぜい摂氏700 が限界である。



金属の融点は、1500 から2000 の間であるため  
さすがに飛ばした炎では、鋼鉄を融解させることは出来なかった  
のである。

が、しかし、

爆風により、ガジェットとエリオットの距離はある程度開くこと  
が出来た。

「エリオット隊長……。 本当にすみません・・・」

この状況下で謝っている場合か！！ と、俺は怒りたかったが、  
正直言つて、あまりいい状態ではない。

取りあえず状況から、テロリストはたぶん全滅だろう、様子を見  
れば大体分かる。

だが、同時に人質も全滅しているだろう。

まあ、テロリスト達がこんな状態なんだ、無事である方がおかし  
い。

大体の考えがまとまった所で俺は、  
部隊員に指示を出す。

「総員退避！！」

.....。

.....。

アレっ、何故みんな無言。

「エリオット隊長.....。

いきなり逃げるんですか」

「状況的に撤退した方がいいだろう、この状況なら……」

おかしい、まともに戦力分析した結果、『逃げるべきだ!!』と、俺の本能が言っているんだが、なぜか知らんが、俺が間違っているのではないかと思えてきた。

俺がこんなことを考えている間にも、俺を追ってこっちまでやって来た、もう一機の4型と、テロリストを始末したであろう、ガジェットドローン3型が出てきた。

「仕方が無い、総員、対質量兵器用の電撃網スパイダーボルトを用意して、さっさとあいつらの回路を停止させるぞ!!」

そう命令を下したあと、すぐにロウランのそばに行つて、『俺とお前は、あいつらの足止めだ……』と言ったら、死ぬほど嫌そうな顔をされた。

まあ、何を言われようと、俺たちが足止めをするのだが、ここで部隊員の一人が重大なことに気がついたそうなので、俺はその報告を念話で聞いていた。

《隊長、報告です》

俺は二機の四型を、鎌で牽制しながら、

一機の三型の相手をしている。

どうもこいつ等には、相互リンクと学習能力があるらしく、一撃目の炎で懲りたのか、俺に近づこうとしてこない。

まあ、その代わりに、三型の砲撃は、滅茶苦茶飛んでくるんだけどね。

《あまり余裕は無いから、手短に頼む》

さすがに、俺に余裕が無いことを感じたのか、少しばかり緊張の色が見える……いや、窺えるだな、見えてないし。

まあ、このとき俺は無駄なことを考えていた気がする。

余裕が無い時ほど無駄が出る、それが人間の本質的な問題点だ。

まあ、そんな事はさて置き、内容に耳を傾けると……。

《……非常に申し上げにくいのですが、スバイダーボルト電気網の常備が……三つしかないんです》

俺はこのことを聞いた時、チョットだけ……ほんの少しだけ、焦った。

《……非常に申し上げにくいのですが、スバイダーボルト電気網の常備が……三つしかないんです》

この連絡は、隊長から少し離れた所で、ガジェット三型と戦う、僕の所にも届いていた。

隊長と違い、ほとんど余裕の無い僕には、あまり考えている時間

は無く、

この手に握られた剣、『シェラード』を構えながら、一回、二回、三回と切りつけていくが、一向に傷がつかない。

この状況はマズイ……。と僕は考えるのですが、スバイダーボルト電気網が使えないのでは、打開する方法も無い。

そんな事を考えていたら、エリオット隊長から念話が来た、

《ロウラン。無事か！》

《今の所は大丈夫です……》

僕は切羽詰った状態で必死で答えている。  
それを察したか察していないかは、分からないが、  
隊長は手短に作戦を伝えてきた。

《じゃあ、前の奴から目を話さないよう、注意しながら聞いてくれ》

エリオット隊長は、そこで一旦句切ると、  
本当に手短に、説明してくれた。

《全力でこっちまで逃げて来い、そうすれば何とかする》

なんて簡単なんだろう……。そういった感想を僕は考えたが、  
深く考えている余裕など無く、取りあえず。

《分かりました。全力でそちらに向かいます》

そう答えると僕は、本気で……。自分の限界に近い速度で、  
飛んで逃げ始めた。

後ろを見れば、あの丸い奴も、  
僕に砲撃を打ちながら、こつちを追ってくる。

《ロウラン。あと300mだ!!》

エリオット隊長の声が聞こえてくる。

そして、後ろを気にしながら前を見ると……目標地  
点で、必死に三機のガジェットと応戦している、隊長の姿があった。

……はっ?……

俺の目の前に見えるのは、どう見たって何とかギリギリで凌いで  
いる、

隊長の姿が見えている。

《ロウラン、何をやっているんだ! 準備は出来ているんだ、さ  
っさと来い!!》

少しばかり唖然として、動きが止まってしまった僕に、

隊長は念話の音量を最大にして伝えてきた。

その言葉を聴いて冷静な判断がある程度で切るようになった僕は、  
隊長の方へ向かった。

エリオット

「やっと……。 やっと俺の出番が来た〜!!」

ロウラン

「隊長、五月蠅いですよ」

エリオット

「今まで作者がサボっていた分を、 たった一週間で書かせたんだ。なんとなくテンション上げないと可哀想だろ」

ロウラン

「否定事態はしませんが、昨日までテストだったんですから、このオマケだつて書きたくないのでは？」

エリオット

「今回は短く切り上げるとするか。……………と云うことで、早速コーナーに入りたいと思います!!」

ロウラン

「言っていることとやっている事がまるで違う……。 まあ、取りあえず最初のコーナーは!!」

エリオット

「コーナーは……………なんだろうな……………」

ロウラン

「うわぁ〜テンションだけ無駄に高くてやっтерることグダグダだ……………。 って感じの評価受けますね、確実に……………」

エリオット

「コホン……。取りあえず最初のコーナーは、『ネタバレ!!』」

ロウラン

「隊長……。貴方この作品の存在意義を消す気ですか!!」

エリオット

「だってこうした方が早いじゃん……。きっとあの作者は、伏線を消化する前に、力尽きるからさ……」

ロウラン

「否定はしません、否定は……。でもネタバレはちょっと、マズイ気が……」

エリオット

「最初のネタバレは、『俺が生 会を、ハーレムにする!!』」

ロウラン

「ネタバレ以前に、話が違う……」

エリオット

「なかなかいい案だが、生徒 って何処にあるんだ?」

ロウラン

「生徒会って言ったら……。ああ、アレです! 取りあえず作者が、楽しそうだしやろうかなって参加した。テストメント先生主催の『私立聖祥大附属学校日常録。Nanoha Rumble!』で、学校を仕切っている人達のことです」

エリオット

「学校を仕切っているのは、『はやて会長、タカト副会長』……。俺はここに宣言する、さっきの宣言は嘘だ！！！」

ロウラン

「それは良かった。では隊長も壊れ始めたところで、次回いつまで続く『プロローグの後編』でお会いしましょう」

エリオット

「そこは俺の……。 (時間切れにより削除されました)」



## プロローグ：とある事件の始まり（中編）（後書き）

次回から、正式におまけがスタートします。

何やろうか決めてないんで、こんな中でも遣ればって人を募集します。

さて、次回の更新はいつやら、二ヶ月以内に更新はしたいですね。

プロローグ：とある事件の始まり（後編）（前書き）

うん……少しだけ反省はしています。

shadowは真面目に書いてたけど……LIGHTはもっと早く書けるようにします。

ちなみに今回は急いでないけど手抜きです。

## ブローグ：とある事件の始まり（後編）

とある世界でのことだった。

それは、管理局と敵対するテロリストたちを掃討する戦いだった。

だが、俺はその戦いには行けなかった。

それは俺だけではなく、他の奴もだった。

そこにいたのは、たった一人……体の傷も心の傷が癒えていないはずのレンだけだった。

あいつは俺たちに嘘の情報を流して、別の場所にい変えた挙句そこに閉じ込めたのだ。

俺たちはあいつが死んだと思っていた……だからせめて死にざまを見に行こうと、その世界に向かった。

そう、戦いがすべてが終わった後、俺たちが見たのは……傷一つ、返り血すら浴びずに、ただ一人地面で眠る、レン・クロフィールの姿だけだった。

そして俺はその日から、親友の姿を見失った。

別にあいつが行方不明だったわけじゃない……あいつがあいつで無くなったただけだ。

それまでのレンは、不器用ながらも感情を表現し、自分と人との関係を大切にしながら人と接する事が好きな奴だった……。

だが、事件の後のレンは、まるで人が変わってしまったようになっ

ていた。

自分の事を否定し。

大切なものを見失い。

生きる意味さえ見失った。

屍のような姿だった。

初めてレンを見た知り合いはこう言った。

『彼は何て優しくて他人思いなのか、それに加えて謙虚で人が良い、彼ほど素晴らしい人間はいない』

俺はその言葉を聞いたとき、完全にレンが、レンでない事を知った。

ただ、それだけだった……。

だが、あいつはこう言った。

『俺の砕けた欠片が、復讐を……仇討をつて言ってくるんだ……』

だから俺はあいつを信じている……。

砕けた心に残った、レン・クロフィールの存在を、俺は信じ続ける……。

「フレイム・スラッシュ!!」

真っ赤に迸る炎。

その炎は迫りくる光をすべて落とすが、それ以上の戦果は期待できないようだ。

「ちっ！！」

エリオットはその様子を見ると、吐き捨てるように舌打ちをして、攻撃の手を止め一歩下がる。

彼の今いた部分には、別のガジェットの攻撃が飛来していた。

今、現在エリオットが頭の中で考えているのは現状の打破……そのための布石として自分の部下に作戦があるからこっちへ来いと言っておいたのだが、なかなかこっちに来ない。

畜生……何やってやがんだ……ロウランの奴は

彼は、ほとんど無駄のない動きの中に、一瞬のすきを作る事になると分かりながらも、なかなか来ない神風ロウランを呼びだすために、思考を一瞬別の事に回すことを決めた。

《ロウラン、何をやっているんだ！ 準備は出来ているんだ、さっさと来い！！》

エリオットの魔力値で相手の脳を破壊しないように気を付けた大きさの大音量の念話で、ロウランへのメッセージは発せられた。

これで大丈夫か……

その一瞬…… たった一瞬だけ気を緩めてしまったエリオット。  
その隙を狙う様に三機のカジエツトはエリオットを狙うが、この  
カジエツトたちに心があれば多分こう思っただろう…… 所詮は一瞬  
の隙であつたと。

そうエリオットはすべての攻撃を何の気なくかわしきつた。

前後から来るカジエツトの刃を……。

それと同時に発射された、砲撃を……。

何も気にすることなくかわすと、走りくるロウランと合流するた  
めに彼も動いた。

最初に行った事はいたって単純。

自らを囲むように展開していたカジエツトたちを、炎を使う事  
により一定の方向に回避させた事。

そして……。

「ルイン…ブラスト!!」

そしてノンチャージの砲撃を、ロウランを追っていたカジエツト  
にぶつけ、距離を大きく離させる。

それだけの行動で、四機のカジエツトたちは単機孤立の状態へと  
陥らせた……それが『本物の天才』と言われたエリオットの実力で  
あつた。

「今だ!! あ那片腕の無い四型以外に狙いを付けて撃て!!」

そう響くエリオットの声……それを合図に、今まで用意を重ねて  
きた局員たちがとある技術者が開発した網を発射。

それに絡みとられたガジェットたちの動きは見る見る鈍くなってい  
いき、

バチッ。

と一回大きな音を立てると……。

三機のガジェットたちはまるで先ほどまで動いていた事がウソだ  
ったように止まった……。

だが、それが現実であつた事を証明するように最後の一機が……  
力強くその腕を振り上げているように見えた……。

「さて、どうしたものか」

先程まで四機のガジェットドローンの改良型が暴れていたため、  
あまり息の付く事の出来なかった現場に、少しだけ安心感とあと一  
機いるという緊張感が漂う中で、エリオットはふとこのような事を  
言っていた。

エリオットの魔法は。

異常なほど強い……。

それゆえに常に押さえていなければならない……そんな状況があ  
るためエリオットは自分の魔力を自分の魔力で抑えるという、よく  
わからない状況を作っている。

そしてそれは今の状況では少し拙い事になっていた。

まだあと百隊は破壊できそうな魔力を保有しているエリオットだが……町中の、それもすぐ近くに仲間がいると言う状況では彼の魔法の行使状況に問題を出しているうえ……。

抑えている方の魔力が、そろそろ限界に近づきつつあるのであった。

その上で……。

(The flame of the Lord, take extra melted.) 【主の炎で、溶かしてしまいましょう】

その上で……珍しくエリオットの言葉に反応したのは彼のデバイス、フォルスであった。

「今の状況分かっているんだよな、フォルス……」

少し苛立ちの入った声で、自らのデバイスに話しかけるエリオット。

彼は目線の先では、ガジェットの方を見てはいるが、

それよりも、長年連れ添ってきた相棒の突っ込みどころ満載の言葉の方が気になっていた。

(It is of course, we know until ten from scratch) 【それは勿論、一から十まで分かっています】

「それなら……」



そうエリオットが言いかけたところで…… フォルスはエリオットを諭すようにこう言った。

(So would you him with his Lieutenant) 【だから貴方は、彼を副官にしたのでしょうか】

そう言われてエリオットは振り返る……。

旧知の親友と同じ蒼い髪。

手に握られた細い剣。

そして何より、強い瞳をもった少年。

ロウランを見たエリオットは、少しだけ彼を見て固まった。

完全に、頭が止まっていた。

だが止まる寸前に決めた事を、行っただけの決断は下していた……。

「ロウラン以外の局員は、そのポンコツたちと共に撤退……」

彼の部下たちは誰一人として、エリオットの命令に背かなかった。背けば死ぬ…… エリオットの背中を見るだけでそれを全員が感じ取ったのであった。

それを確認すると、エリオットは、そう一言だけ言っと……。誰にも聞こえないよう小さな声でこう言った。

「魔力分断用フィールド、解除……」

(Consent is) 【了解です】

少しだけ……紅みが増した煉獄の装束。  
少しずつ、ゆっくりとだが進行していく紅蓮の気配。

それらが解放される直前、エリオットは大きく良く通る声で、口  
ウランに言った。

「ロウラン……シェラードを開放しろ!!」

こうして、炎熱最強と言われ。  
相棒を失い、二度と使う事の無い力を彼は解放した……。

その瞬間。

大地は真っ赤な……紅色だけの世界となった。

事後報告。

以下の者を一月の謹慎処分とし、以下の場所へと異動とする。

エリオット・ラーjest二等空佐。

シェラード・C・ロウラン一等空尉。

一月後より……時空管理局特定危険物捜査室へと異動とする。

謹慎中及び、異動先責任者……バルト・シエルト一等空佐。



プロローグ…とある事件の始まり（後編）（後書き）

次回は早めに……てかまだshadowの一月前か」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0075i/>

---

魔法少女リリカルなのは Light.the. story

2010年10月30日10時54分発行